



すべての子どもたちに学ぶ喜びを

宇都宮大学国際学部 4年 本望 茜・菅原 里紗

私たちは2012年9月26日に静岡県浜松市にある南米系外国人学校ムンド・デ・アレグリア校(以下ムンド校)を訪問致しました。ムンド校は2003年、ペルー人学校として開校し、2005年からは南米系外国人学校として運営しています。現在はブラジル・ペルー・パラグアイ・ボリビアなど様々な国の子ども達が在籍しており、4歳から18歳までの約220名の子どもたちが通っています。今回ムンド校を訪問させていただき、学校見学や校長先生からの貴重なお話をお聞きすることができ、非常に充実した時間を過ごすことができました。

ムンド校の校長先生は元々自動車メーカー・スズキの外国人労働者の通訳として働いており、外国人労働者たちが自分の子どもの教育に不安を抱えている現状を目の当たりにしていました。結婚退職後、通訳のボランティアとして活動し、ペルー領事館主催の教育フォーラムに参加した際に、ペルー人の知人に「ペルー人のための母国語で学べる学校をつくってほしい」と依頼され、ムンド校の設立にいたりました。校長先生は開校する際、各種学校認可を目標として準備を始めたそうです。そのため、開校から1年後の2004年には各種学校の認可を受けることができました。当時、日本において朝鮮学校や中華学校で各種学校に認可されている学校はいくつかありましたが、南米系外国人学校で各種学校として認可されたのは、ムンド校が全国で初めてとなりました。しかし、その後も経済的に厳

しい状況が続き校長先生は何度も閉校を決意したそうです。そんな時、校長先生の熱心な働きかけもあり、地元企業を中心に51社から約2千万円の寄付金を受けました。これをきっかけに月謝を下げるなど、親や子ども達にとって、さらに通いやすい環境になるよう工夫を重ねたそうです。2005年には準学校法人格を取得し、現在は県と市から支援を受けているそうです。

子ども達は休み時間は元気良く走り回って遊んでいましたが、授業が始まるとみんな真剣な顔で、一生懸命勉強していました。様々な国籍で年齢も異なる子ども達ですが、みんな仲が良く、楽しそうに遊び、楽しそうに勉強している様子が印象的でした。ムンド校の入口に「教育に国境はありません。すべての子どもたちに学ぶ喜びを」というスローガンが大きく掲示されていました。まさにその通りだと思います。このような子ども達の学習の場が得られているのも、子ども達のために県や市に何度もかけあい、企業などに何度も足を運んだ校長先生の熱い思いがあったからだと思います。また、県や市からのサポートは外国人学校を運営していく上で、必要不可欠であり、さらに企業からの支援も非常に大きな役割を担っていると思います。行政や企業との連携を強化し、1人でも多くの子ども達が「学ぶ喜び」を知ることでできる環境作りが必要だと、今回の訪問を通して改めて強く感じました。

第2回「外国人児童生徒支援会議」報告

国際学部特任准教授 若林 秀樹

HANDS プロジェクト「外国人児童生徒支援会

議」が11月8日に開催されました。県教委指定の

「外国人児童生徒教育拠点校」(平成24年度は小学校30校、中学校10校、計40校)の外国人児童生徒担当教員をメンバーとする研修・情報交換の場として開催されるもので、本年度2回目となる今回は校務多忙の中21校の担当教員にお集まりいただきました。

今回は、日本語教室で使用するテキスト教材の活用法紹介や、教科学習における子どもの“つまずき支援”をテーマに発表・協議が行われました。

開催に先立ち、事前に拠点校を対象に二度のアンケート調査を実施しました。調査では、①日本語指導にどのようなテキストを使っているか、②テキストをどこまで教えたなら日本語指導を終了するか、③漢字指導用のテキストを決めているか、④今後どのようなテキストを使ってみたいか、⑤在籍学級への入り込み指導を行っているか、などについて質問し、31校から回答を得ることができました。

会議ではアンケートの結果を参考に6名のメンバーから、次の教材の効果的な利用法について発表していただきました。①『大田原市の漢字検定ドリル』大田原市教育委員会(大田原市立西原小学校・戸村知子先生)、②『絵でわかるかんたん漢字80、160、200』スリーエーネットワーク『にほんごワークブック』凡人社(那須塩原市立東小学校・手塚正人先生)、③『みえこさんのにほんご』MIEF(小山市立大谷東小学校・時田道仁先生)、④『日本語学級1、2』凡人社(佐野市立天明小学校・神戸浩子先生)、⑤『ひろこさんのたのしいにほんご』凡人社、『にほんごをまなぼう』文部省(栃木市立大平中央小学校・天海由紀子先生)、⑥『こどもの日本語ライブラリ』JYLプロジェクト、『DAISY』

日本障害者リハビリテーション協会(真岡市立真岡西小学校・佐藤和之先生)。それぞれの発表には、教材の特徴を生かすための日頃の工夫が盛り込まれ、参加者からは「大変参考になった」「今度ぜひ利用してみたい」などの意見が聞かれました。

後半は、佐野市外国人児童生徒指導員の原田真理子先生から、教科学習指導における子どもの“つまずき”を支援する手立てや工夫の研究について提案がありました。外国につながる子どもにとって、日本語習得後の教科学習導入の重要性和困難さは、近年大きな課題となっています。そこでは、多国籍化や多言語化する子どもへの対処も考慮に入れた解決法として、「やさしい日本語」や「国語教科書の活用」が注目され始めています。

原田先生には、小学校国語科学習におけるポイントを集約した資料を準備していただきました。そして教科書で実際の教材を示しながら、学習用語の効果的な伝え方や子どものつまずきやすいポイントを指摘していただきました。原田先生の20年以上の指導実績を踏まえた提案に、参加者からは「身近な教科書がこんなに有効とは知らなかった」「大切なことを学ぶことが出来た」など驚きの声がかれました。

HANDSプロジェクトでは、主に小中学校教員対象の手引き書である『教員必携・外国につながる子どもの教育』第3刊の作成を進めており、今回議題となった教材紹介や、子どものつまずき支援に関する内容も盛り込まれる予定です。また、栃木県内の全中学校のご協力を得て実施している「外国人生徒進路調査」の結果についても収録される予定です。

進め
日本語教室

第3回

今日も元気いっぱい
活動中です!

佐野市立城東中学校教諭

塚田尚美

佐野市立城東中学校の今年度の在籍生徒数は369名です。そして日本語教室に通級する生徒は

12名で、その内6名が日本語の初期指導を必要としています。